

における新世界の前衛たる資格を要求しうる完全な権利をもつことにならう。

バイレンソンは修辭的麗句の裏側の現実を以下のように形容している。

思想、生活、価値基準の大きな懸隔とは裏腹な、我々の、アラブ民族との人種上の近似性にどんな価値があるというのか。「人種的相違」が存在しても、右のような他の事柄すべてにおいて、我々はかなりの程度ヨーロッパ人あるいはまたアメリカ人により近いのではないか。……誤った博愛主義や偽りの伝道布教主義に立つことなく……我々はアラブ・イシユブとの和平を望む。東方の覚醒という場合、「民族的」東方であれ、「階級的」東方であれ、「宗教的精神的」東方であれ、どんな東方であろうとも革命的アプローチはない。……他の人間集団を解放するために我々はパレスティナにやつてきたのではない。我々自身を解放するためにここに来たのである。⁽¹⁰⁾

予言の自己実現がなされていく過程でこうした理論家が登場したのであった。ヨーロッパ・ユダヤ人に対する避けがたい財産没収をやるつもりであり、その後にはユダヤ人プロレタリアート、アラブ・プロレタリアートの搾取が続くのだと、かくも断固たる調子で言い切ることで、社会主義者を自任するシオニストは、ヨーロッパ人を動員するためには何もなさず、パレスティナ人の怒りを爆発させるにはあらゆることをなしたのである。

パレスティナにおけるシオニストの努力に対するナチの賞賛

ナチスはパレスティナ分割が全く動かしがたいものと観念していたので、主たる関心はパレスティナに在住する二千人のドイツ人の運命に向けられるようになった。カトリックの聖職者もプロテスタントの主流派も少数ながらいたが、ほとんどは、一九世紀以来キリストの再臨を期待してパレスティナに移住してきた敬虔主義派、テンペル教団の人びとであった。彼らは最終的に六つの入植地に定住して生活も順調に経過したが、そのうちの四つが後にシオニストの飛領土（他領に囲まれた包領）に変化することになる。世界シオニスト機構指導部が、テンペル教団の人びとの問題をめぐって、といつてもこの時にはほとんど教団全員が誠実なナチ黨員になっていたが、この人たちのことで、ベルリンを敵にまわすのをどんなに避けようと欲しても、地域のナチ党は、分割後ユダヤ人による自発的なポイコットがおこなわれれば自らの立場が全くの困難に陥ってしまうと状況を理解していた。ドイツ外務省はドイツ人入植地を直接イギリスのコントロール下におくか、あるいはもつと現実的な解決法としてドイツ人をアラブ側の領域に移動させることを望んだ。

アラブ大衆の圧倒的意見は分割反対であった。もつとも、フサイニ家と対抗していたナシシビ家はユダヤ人国家が小さければ受け入れる可能性もあった。イギリスの提案への反対もナシシビ家の場合はきわめてためらいがちで、フサイニ家に対する激しい対抗党派的憎しみと結びついていた、分割反対への熱意の明白な欠如によって、アラブ共同体内部はひどい内戦状態に見舞われることになった。パレスティナの外で、ピール分割案の受け入れをあえて言外にほめかしていた唯一のアラブ指導者は、その首長国が分割案ではパレスティナ・ミニ国家と合併することになっていたトランス・ヨルダンのアブドゥラーであった。

アラビア半島のイブン・サウードは沈黙したままであった。エジプトとイラクの支配王族は公式には不満を表明していたが、本音では、彼らの唯一の関心事は、分割が自国民の蜂起をひき起こし、彼らとイギリス軍を攻撃する全般的な運動の引き金になってしまうのではないかとということにあった。アラブ側が分割案の実行を阻止しうる能力をもっているか否かについてドイツ側が否定的だったのも頷けるが、ムフテイが一九三七年七月一五日、ついに領事館を訪問した折り、デーレは全く何も提示しなかった。ただちにこの会談についてデーレは本省に以下のごとく書き送っている。「大ムフテイは、新ドイツに対する共感を強調し、アラブの反ユダヤ闘争にも同情を寄せてくれるものと期待し、また実際この闘争をドイツが支援する用意を調べてくれるものと期待している旨、表明しました」。ムフテイの同盟提案に対するデーレの反応は、事実上侮辱的なものであった。懇願するムフテイに対し、デーレが語ったところでは「結局、我々が調停者の役割を演ずる限り問題はない。アラブの望むところにドイツが示す共感は、ドイツ側の声明の中には、はっきり書かれていないほうがおそらく戦術的にもアラブ側の利益になる、と付け加えた⁽¹⁾」という。

この年一〇月、今度はシオニストがナチスを招待する番になった。一九三七年一〇月二日、定期船ルーマニア号が二人のドイツ人「ジャーナリスト」も乗せてハイファの港に到着した。二人の素性は実は親衛隊将校で、早速上陸したこの二人は、ヘルベルト・ハーゲンと下僚のアイヒマンであった。二人はスパイのライヒェルトと会い、その日の夜にはファイヴァル・ポウクスと会っている。ポウクスは二人を案内し、カルメル山からハイファの街を一望させ、さらにキブツにも連れていった。十数年後、アイヒマンはアルゼンチン潜伏時、パレスティナでの経験の一部始終をテープに録音し、このほんの短期の滞在を虫のいいノスタルジーでもって以下のように回顧している。

私は実際ユダヤ人入植者が自らの国をつくり上げている様子にきわめて強く印象づけられた。私自身自分が理想主義者であったからまたそれだけユダヤ人の生きようとする捨て身の意志を賛美した。それに続く数年間、私は交渉相手のユダヤ人によく語った。もし私がユダヤ人だったら、狂信的なシオニストになっていたであろう。違ったことを想像することは不可能だ。実際、私は考えられる限り最も熱心なシオニストになっていたであろう、と。⁽²⁾

しかし、この二人のSSは、パレスティナの密偵との接触の際ミスをおかした。イギリスのCID (Criminal Investigation Department、警視庁刑事捜査課) がライヒェルトの親衛隊リングに気づいたのであった。二日後二人は即決で国外退去処分を受けエジプトに追放された。ポウクスがエジプトまで二人を追いかけて、一〇月一〇日、一日とカイロのカフェ、グロッピで議論が続けられた。遠征報告の中でハーゲンとアイヒマンはこの会合の時のポウクスの言葉を慎重に訳している。ポウクスは、

シオニスト国家はできるだけ速やかに必ず確立されねばなりません。……現在ピール報告書に記された当座の提案に従い、またイギリスの部分的約束と合致してユダヤ人国家が確立されれば、国境線はその望むところによつてずっと外側に押し広げられることになるかもしれません。⁽³⁾

と述べ、さらに続けて、

ユダヤ民族主義者グループの中には、かかるラディカルなドイツの政策にきわめて満足している者も

いました。けだし、パレスティナにおけるユダヤ人人口が今後さらに増えていけば近い将来ユダヤ人は数の上でパレスティナ・アラブを圧倒する勢いがあるからです。

二月、ベルリンを訪問した際ポウクスは、ハガナがナチスのスパイとして行動する用意があると提案しており、さらに今回も情報を二つ提供することによってシオニスト側の誠意を示したのであった。ポウクスはハーゲンとアイヒマンに、次のように語っていた。

ベルリンで開催されている汎イスラム世界会議は、二人の親ソ派のアラブ指導者、エミール・シエキブ・アルスランおよびエミール・アディル・アルスランと直接コンタクトをとっている。……ドイツへの送波がとくに顕著な非合法共産党放送局は、ポウクスの言にしたがえば、放送中はドイツ・ルクセンブルク国境沿いに走る大型トラックに設営されている。

次はムフティが接近し、再びドイツの後援を求めた。今回ムフティは、代理として、サイード・イマーム博士を送りこんだ。博士はドイツの大学で学んだ経験をもち、それに長い間ペイルトのドイツ領事館とも接触していたが、ベルリンへ直行してひとつの提案をおこなった。もし「ドイツがアラブの独立運動をイデオロギーの面でも、また物質面でも支援」してくれば、ムフティは「アラブ・イスラム世界にナチスの思想を広め、しだいに広まりつつあるようにみえる共産主義と闘い、あらゆる可能な手段を用いることによつて」応えるつもりである、と。ムフティはまた、「アラブ、イスラム教徒がいるフランスのあらゆる植民地・委任統治領でもテロ行為を連続しておこなう」とも提案した。もし、この闘争に勝った暁

には、ムフティは「唯一ドイツ資本とドイツの知的資源のみを登用する」ということも誓言していた。これはすべてセム語族とアーリア民族とが分かれたままの状態を保証する脈絡の中で述べられたといえよう。そうした課題においては、「両民族のナショナルな確信を維持・尊重する」と微妙な言い回しがなされていた。

パレスティナは今やドイツ国家およびナチ党官僚制のあらゆる支部組織から徹底した精査を受ける対象になりつつある。ドイツの親シオニストはなお有効な論理をもっている。とりわけ経済人は、ハーヴァラ協定がドイツの産業に役立つ点を強調している。ナチ・シオニスト関係に対する批判は、分割案で提案されているユダヤ人小国家が国際的に承認されていくとユダヤのヴァイカンとみなされるようになっていき、ドイツにとつてもユダヤ人の取り扱いをめぐって外交問題を惹起させかねない、ということに関わってくる。以上がハーゲンとアイヒマンの今回の旅の報告における主論点であった。

ナチスのディレンマを解決することになったのは結局イギリスであった。すでにイギリスは、万が一シオニスト国家が成立した場合、何がその後おこるか熟慮しはじめていた。世界戦争の可能性は明らかになつてきており、シオニスト国家創設といつてもそれはアラブをヒトラーの陣営に追いやつてしまうのを保証したようなものであった。さらに、好戦的な日本軍との戦争の可能性も出てきており、中東経由で、すなわち、陸路およびスエズ運河経由で部隊を移動させる能力をどうやって維持するかも重大な問題になりつつあった。土着の人びとの暴力による反対行動は、あつてはならないものになつた。したがつてピール分割案は急ぎ葬られることになり、イギリスは現出した枢軸の同盟がアラブの反乱から利益を引き出さないうちに反乱を壊滅させることを決断した。かくして英軍およびその後はシオニスト入植部隊によつて反乱は残虐に粉碎され、反乱の大義も滅じられてしまった。

ヒトラーにとつては、ユダヤ人国家が成立し、それがヴァイカンのようなものになる可能性に思わ
ずらわされることもせつかくなくなっていたのに、イギリスがそれを実際に提案したという事実によつて、
ユダヤ人国家の将来の可能性について重大視せざるをえなくなった。長期的なドイツの軍事戦略もいまや
アラブの見解への配慮を対外政策の一要素にすることになった。多くのドイツ人外交官が、ハーヴァラ協
定は最終的な国家創立を保証するものだといいつつも、外務省全体の見解も協定反対に向かい
始めた。しかし協定は、「ナチ」党人ではなく職業外交官であったオットー・フォン・ヘンティヒの介入で
事なきを得た。彼はすでにヴィルヘルム二世時代およびヴァイマル共和国時代にシオニストとのつきあい
があった。ハーヴァラのベルリン代表エルンスト・マルクスによれば、「ドイツ国民とその精神を深く愛し
ていた」フォン・ヘンティヒは、「シオニズムを駆りたてている力を自分自身の祖国愛と同質の要素として
理解していた」。したがってフォン・ヘンティヒはシオニスト同志マルクスとともに「パレスティナの優先
的取扱」をやめさせないようこれつとめた。

フォン・ヘンティヒは、ユダヤ人の祖国建設に対する資金的貢献の点だけでなく、ドイツからパレス
ティナへのユダヤ系移民の数もあまりに少なくて、パレスティナ発展に決定的な影響を及ぼしえない
そういう事態になっていることを証明するための適切な手段を準備しておくよう私（マルクス）に勧
告してくれた。そこで私は、再建作業のあらゆる重要局面におけるポーランド・ユダヤ人の貢献がい
かに大きいかを強調し、さらにアメリカ・ユダヤ人の資金面での寄与についても述べて、ドイツ・ユ
ダヤ人の努力がそれらと対照的にどれほどわずかなかなされてないかを比較した覚え書きをまとめて
おいた。

フォン・ヘンティヒは、ヒトラーを説得してシオニズムに役立たせるこの任務が他の誰かに代理させる
のでなく自分でやらねばならないこと、しかもヒトラーが笑って上機嫌で、ユダヤ人に対して習性とし
てかけていた温情をたつぷり示す、その「好機」をねらわねばならぬことも承知していた。一九三八年は
じめのある日、フォン・ヘンティヒは電話でよい知らせをマルクスにもたらした。「総統は肯定的決定をし
てくれた。パレスティナへの出国の上でのあらゆる障害が今やとり除かれた」と。

当初ナチスはアラブ反乱に中立的態度をとっていた。一九三七年の英国王戴冠の日、テンペル教団コロ
ニーすべての地区において鍵十字の旗をイギリスへの共感をあらわす意味で掲揚した。英軍部隊に泣きつ
いてはならぬことも、モーズレイ信奉者とかかわりをもたぬことも厳命された上でのことだった。しかし
ベルリンは圧力をかけ続け、ユダヤ人の資金と移住民がパレスティナへ送りつけられたが、他方、国防軍
防諜部長カナリス海軍大將は、ムフティの名を一九三八年に資金援助者リストに載せている。ところがム
フティは政治的軍事的力量の片鱗さえ示せなかったから、不規則にしかなされていなかった資金提供もつ
いに停止されるにいたった。以後もアラブ反乱への軍事的非介入の政策は一九三八年九月のミュンヘン
会談まで厳格に維持され、武器の積送は一九三八年末になつてはじめて用意されるようになった。そんな
つても、英帝国に脅威を与えることでロンドンと敵対関係に陥るようなことをドイツは望まなかったため
サウデイ・アラビア経由のはじめての輸送は突然キャンセルされることになった。ドイツはサウデイの外
相がイギリスのスパイであると確信するに至った。武器搬送のさしとめとともに、アラブ反乱に対するド
イツの関心は止んだのである。